

論説文：AI と人間の創造性

私たちはいま、人工知能（AI）が人間の「創造」という営みに深く関わる時代を迎えている。AI は膨大な情報を学習し、与えられた条件のもとで新しい文章や絵画、音楽を生み出すことができる。その成果の精度や完成度は、もはや人間の作品と見分けがつかないことさえある。しかし、そのとき私たちは問い直さねばならない。「創造する」とは、いったい何を意味するのか、ということ。

AI の生成は、無数の過去データの組み合わせによって成り立っている。AI が生み出すものは、既存の要素を統計的に再構成した「最適解」であり、そこには「経験に基づく意図」や「感情の揺らぎ」といった人間的な要素が欠けている。言い換えれば、AI の創造は「過去の模倣の延長線上」にあるにすぎない。

対して、人間の創造は「未知への跳躍」である。人は、失敗や矛盾、孤独や希望といった生の実感の中で、言葉や表現を模索する。その過程で、これまで存在しなかった価値を生み出す。たとえば、一枚の絵が人の心を動かすのは、そこに「技術的な完成度」だけでなく、「表現者の存在の痕跡」が刻まれているからだ。創造とは、単に何かを作る行為ではなく、自分自身と世界との関係を再構築する行為なのだ。

では、AI の登場によって人間の創造は無意味になるのだろうか。むしろ逆である。AI が容易に「作品」を作り出せる時代だからこそ、「何を、なぜ創るのか」という問いがいつそう重要になる。AI は人間の創造性を奪うのではなく、それを映し出す鏡となる。AI が模倣を極めるほどに、人間は「模倣できないもの」、すなわち「主体的な意味づけ」や「存在の証明」を通して創造することを求められるのである。

AI が示すのは、無限の可能性ではなく、有限な人間の意味作用を照らし出す光である。

だからこそ、創造の核心にあるのは「道具としての AI」ではなく、「世界に向かう人間のまなざし」なのだ。